

東京・日本橋一丁目遺跡

にほんばしいつちようめ

- 1 所在地 東京都中央区日本橋一丁目
- 2 調査期間 二〇〇〇年(平12) 二月～二〇〇一年七月
- 3 発掘機関 日本橋一丁目遺跡調査会
- 4 調査担当者 仲光克顕
- 5 遺跡の種類 都市跡(町屋)
- 6 遺跡の年代 近世・近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(東京東北部)

日本橋一丁目遺跡は、洪積層からなる日本橋台地上に立地する。

この一帯は、いわゆる江戸前島にあたり、五街道の起点である日本橋がある。日本橋周辺は江戸の中でも一等地で、江戸時代を通じて商業地として栄えていた。

調査地は、日本橋から約八〇m南東に位置する万町の一部で、天正一八年(一五九〇)の家康入府後に形成された町地の一角にあつた。

る。当該地は江戸時代を通じて町地であり、その初期から幕末までの変遷を明らかにすることができた唯一の遺跡である。調査面積は約一〇〇〇㎡である。

確認された生活面は、上位の第一面から一四面を数える。検出された遺構はおおよそ五二〇基である。主な遺構は、石組下水・下水木樋・下水枝樋・穴蔵・土蔵址・胞衣埋納遺構などである。中でも、穴蔵は三一基、土蔵址は一八基と非常に濃密な分布をみせ、江戸の商業の中心地を象徴する。また、石組下水どうしの間隔により、遺跡地が万町の中でも四・五・六番の土地に該当することがわかった。遺物は、多量の陶磁器、瓦類のほかに、漆器や下駄をはじめとした木製品も良好な状態で出土した。

木簡は、第一三面(一六三〇年代から一六四〇年代頃まで)では四七一号穴蔵(一点)・四五五号土坑(三点)・四五三号土坑(四点)及び遺構外(二点)、第一二面(一六五七年の明暦の大火の頃)では四五〇号建物(一点)・四二六号井戸(一点)・四二四号土坑(一点)・四二〇号焼土整理坑(一点)、第七面(一七〇〇年代から一七三〇年代まで)では四一六号穴蔵(一点)、第六面(一七四〇年代から一七六〇年代頃まで)では遺構外(一点)、第四面(一七七二年の目黒行人坂大火の頃)では二六九号穴蔵(一点)、第三面(一七七〇年代頃)では三三八号穴蔵(一点)、第一面(一八二〇年代から一八六〇年代頃まで)では一三三号穴蔵(一点)から出土した。総計は一九点にのぼる。

第一三面の四七一号穴蔵は、本遺跡中最も古い穴蔵で、南北約

二・七m東西約二・一m、床面までの深さは約〇・四〇mが遺存していた。四五五号土坑は、南北二・四m以上東西約一・四m、深さ約〇・二mを測る不整形の土坑。四五三号土坑は南北三・八六m東西二・一m深さ〇・六四mを測る不整形の土坑。木製品のほか大型植物遺体やバカ貝などが多量に出土しており、ゴミ穴と考えられる。

第二二面の四五〇号建物、南北一・二八m東西一・二〇mの範囲に石材や根太・杭・立位の板材を検出したもので、全体の規模は不詳。四二六号井戸は、二四枚の側板を竹釘と竹の箍で接合した桶側をもつ溜井戸。径〇・八〇m深さ一・七三mを測る。四二四号土坑は、南北二・三四m東西二・二八m深さ〇・一四mの隅丸長方形の土坑。四二〇号焼土整理坑は東西三・四〇m南北二・八〇m深さ〇・三三mの不整形を呈する。火災の後片付けのために掘られた土坑であろう。

第七面の四一六号穴蔵は、南北約二・七二m東西一・八一m深さ一・六五mを測る。本遺跡で最も多量の遺物が出土した遺構で、全体の三分の一にのぼる。火災後の後片付けに伴う遺構とみられる。

第四面の二六九号穴蔵は、東西二・一m前後、南北一・八m程を測る。第三面の三三八号穴蔵は、南北二・一六m東西一・四八m深さ一・二四mを測る。第一面の一三三号穴蔵は、南北二・一〇m東西一・八一mを測る。

8 木簡の釈文・内容

第一三五番地遺構外一括

(1) 「江戸上町 大坂屋」 (78)×41×4 019

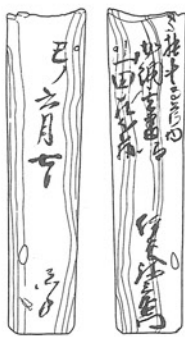
(2) 「上」 径114×厚7 061

第一三五番地四七一号穴蔵

(3) 「新町替町 上者大ふし 長ほり三町 七郎右衛門」 179×53×7 011

第一三五番地四五五号土坑

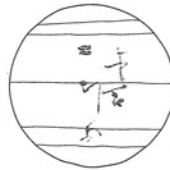
(4) 「能登守荷物 加納玄蕃様 伊藤弥三左衛門」 (286)×67×10 019
 「巳ノ 六月七日 京」



(4)



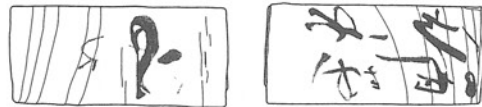
(3)



(2)



(1)



(5)



(7)



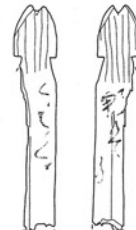
(10)



(11)



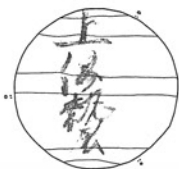
(9)



(8)



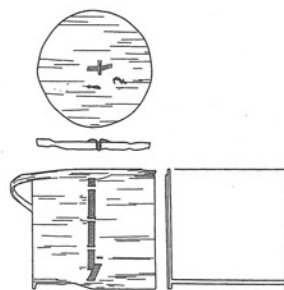
(6)



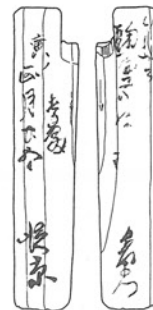
(17)



(15)



(12) (側板とも)



(13)



(19)



(18)



(16)



(14)

- (5) 76×153×5 011
- (6) (154)×25×2 081
- 第三面四五三号土坑
- (7) (210)×23×2 051
- (8) (121)×30×5 039
- (9) 132×24×2 011
- (10) 径(80)×厚3 061

- 第二面四五〇号建物
- (11) 30×28×9 061
- 第二面四二六号井戸
- (12) 径80×厚6 061
- 第二面四二四号土坑
- (13) 213×48×6 011
- 第二面四二〇号焼土整理坑
- (14) (159)×62×7 019
- 第七面四一六号穴蔵
- (15) 157×51×10 011

第六面六番地遺構外一括

- (16) 「御新札」



71×43×8 011

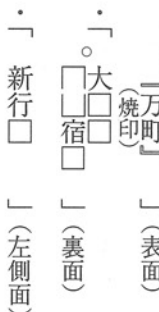
第四面二六九号穴蔵

- (17) 「上伊勢屋」

径114×厚5 061

第三面三三八号穴蔵

- (18) 「四月七日」



89×53×8 011

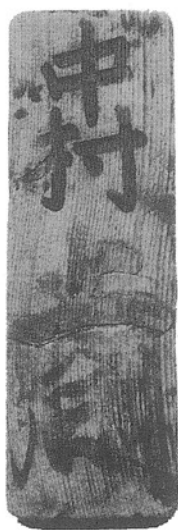
第一面一三三号穴蔵

- (19) おをたき

(216)×26×5 081

(1)は荷札とみられ、下半を欠損する。(2)は曲物の蓋である。表面に墨書がみられ、内容物について記されていたと思われる「上」の

字のみ判読できた。(3)は荷札で、表面には町名及び店名、この店が荷物を受け取る旨が記されている。裏面には荷の名、数量と送り主及びその町名が記される。(4)も荷札とみられ、上端部が欠損する。表面には家中名と宛名、送り主の名が記され、裏面には送った日付と送り元の地名が記される。(5)は性格不明であるが、日付などが記されており、荷札かもしれない。(6)も荷札とみられるが、判読不能である。上下とも欠損する。(7)は荷札とみられ、下端部が欠損する。表面には荷の数量が記されるが、裏面については不明瞭である。(8)も荷札とみられ、下端及び右側の一部が欠損する。(9)も荷札とみられる。下方と側面には木釘の痕跡が残る。片面のみに送り主の店名がみられる。(10)は曲物の蓋である。表面に墨書があり、この容器に容れられていたものについて記されたと思われる、「上」と「かし」の字のみ判読できた。(11)は将棋の駒。(12)は醬の容器の蓋か。(13)も荷札とみられ、上端の一部を欠損する。表面には、荷の宛先及び送り主が、裏面には差出し場所と期日が記される。(14)も荷札とみられる。上端部を欠損し、全体に湾曲している。(15)は中村座の芝居入場券で、土間という観客席の札である。丁寧に角の面取が施され、「中村」の焼印が捺される。表面の墨書「土間」や裏面の陰刻「正」は、部分的に文字を縁取り彫刻しており、使用後のいたずらと思われる。芝居入場券は、管見の限り唯一の出土例である。(16)の札は出入商人用の門札の可能性があり、上方に穿孔がなされる。裏



(15) 表

9 関係文献
日本橋二丁目遺跡調査会『日本橋二丁目遺跡』(二〇〇三年)
仲光克顕「江戸、日本橋における町屋の様相」(坂詰秀一先生古希記念論文集「考古学の諸相」Ⅱ、二〇〇六年)

(仲光克顕(中央区教育委員会))

面には判読不能の焼印が二カ所に施され、この札の使用者名が記される。(17)は曲物の底板である。側面三カ所に側板を留めていた木釘が残存する。墨書は曲物ごと販売していた商品の店名であると思われる。(18)は荷札とみられ、上方に穿孔が認められる。表面に日付と本遺跡地である「万町」の焼印が施される。裏面は不明瞭であるが、「宿」の字がみられることから、荷の届け先が記されていた可能性があるであろう。また、左側面にも墨書がみられる特異な札である。(19)は、右辺の一部以外周囲を欠損するが、荷札とみられる。片面に名字とみられる人名が墨書される。

なお、釈読にあたっては、中央区教育委員会の清水聡氏のご教示を得た。



(東京東北部)

東京・日本橋二丁目遺跡

にほんばしにちようめ

- 1 所在地 東京都中央区日本橋二丁目
- 2 調査期間 一九九九年(平11) 十一月～二〇〇〇年二月
- 3 発掘機関 日本橋二丁目遺跡調査会
- 4 調査担当者 仲光克顕
- 5 遺跡の種類 都市跡(町屋)
- 6 遺跡の年代 近世・近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

日本橋二丁目遺跡は、日本橋から約二五〇m南に位置し、約一〇〇m西には中央通り(旧日本橋通り)が南北に展開する。当該地は、天明一八年(一五九〇)の徳川家康入府後に形成された人堀の一角にあたる。寛永一五年(一六三八)には幕府奥医師久志本氏が拝領しているため、少なくともこの頃には埋め立てられていたのであろう。久志本家拝領後、程なく町人に貸地